コンドルズ『Starting Over』　撮影：HARU

［コンテンポラリーダンス・舞踏］

現実を捉え直す目、コロナ禍で拡充するダンス環境

堤 広志

2020年に感染が拡大した新型コロナウイルスは22年も収まることなく、年明けから年末まで第６波～第８波が襲った。変異したオミクロン株は弱毒化したものの感染力が強く、舞台業界では相変わらず公演の中止や延期が多かった。そんな中、２月にロシアがウクライナへ軍事侵攻。交流の深いバレエ界では日本人のダンサーや留学生の多くがウクライナやロシアから帰国した。また避難民の受け入れ、チャリティー公演などが盛んに行われた。交流の少ないコンテンポラリーダンスや舞踏では、唯一コンドルズが世界情勢にリアルタイムに反応した。

6月、コンドルズは、ジョン・レノンの楽曲から着想した『Starting Over』(「やり直そう、新しくはじめよう」の意)を初演した。主宰の近藤良平が十字架の前に立ち、鳥や犬とのどかに戯れるが、その後は兵士の進軍シーンも挿入される。ウクライナ侵攻の現実を踏まえつつ、アメリカや日本の現状を相対化し、平和を分かち合う視点を確保して共感を呼んだ。彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督に就任した近藤は、自身のプロデュース企画「ダンスのある星に生まれて2022」「ジャンル・クロス」も開催し、新風を巻き起こした。

今在る世界を捉え直した大作

コロナ禍や戦争を直接描いた作品は少なかったが、アーティストの今在る状況を冷静に捉え直す大作が多かった。

笠井叡は稽古場「天使館」を開場してからおよそ50年が経った。途中渡独し、日本を離れた時期をはさむ、カンパニー前期(山田せつ子、大森政秀、山崎広太、杉田丈作ら)と後期のメンバー(笠井禮示、笠井瑞丈、浅見裕子、上村なおか、櫻井郁也、野口泉、鯨井謙太鰈(くじらいけんたろう)、定方(さだかた)まこと)による合同公演『牢獄天使城でカリオストロが見た夢』を開催した。主題は18世紀の詐欺師カリオストロが政治犯の疑いをかけられ幽閉された時、夢みていたのは社会革命や政治革命ではなく、自然界と人間とを結びつける新しい関係性の革命=ダンスだったという解釈である。ペーター・ヴァイスの戯曲『マラー/サド』も参照し、人権の理想を追い求めてきた自身を重ね合わせたのだろう、笠井の全身全霊を込めて踊る鬼気迫るパフォーマンスは観客を圧倒した。

笠井叡/天使館『牢獄天使城でカリオストロが見た夢』　撮影:bozzo

1972年の旗揚げ以来、結成50周年を迎えた麿赤兒(まろあかじ)の大駱駝艦は、新作『おわり』『はじまり』を2作立て続けに

大駱駝艦『おわり』　撮影：川島浩之

発表した。これらは消滅と誕生を繰り返す宇宙をテーマとした連作で、宇宙の謎とされているダークマター、ファントムエネルギー、ホワイトホール、ブラックホールなどに舞踏手が扮して登場する。『おわり』はブラックホールに吸い込まれ収縮する宇宙を、『はじまり』では一転してホワイトホールから物質が放出されて拡大し、新たな銀河が膨張していくさまを表現した。超常的な宇宙の謎を擬人化し、壮大なモチーフを敢えて身体で体現しようとする無茶ぶりが、逆に観客のイマジネーションを豊かに刺激して、舞踏の持つ魅力と可笑しみが余す所なく発揮されるスペクタクルとなった。

だが、麿の妄想力はそこで終わらない。両作ともラストでは全員そろいの水色のスーツを着て、忌野清志郎張りのポップなオリジナル曲「ラララ　サピエンス」を歌い踊る。サビの「ラ～ララ～ララ～　サピエンス」の繰り返しに呼応して「どこへ行くの」「どうするの」「をどるのさ」「時間の終わりまで」と合いの手を入れる。作詞は麿自身だが、宇宙の終わりまで人類が保たないことを暗示する幕切れとなった。

勅使川原三郎は、その稀有な才能が改めて世界に再認識された。新国立劇場の新制作バロック・オペラ、グルック作曲『オルフェオとエウリディーチェ』の演出に起用され、振付・美術・衣裳・照明を含む透徹した深い美意識で喝采を浴びた。鈴木優人（まさと）の指揮、オルフェオにローレンス・ザッゾ、エウリディーチェにヴァルダ・ウィルソン、愛の神アモーレに三宅理恵の配役にダンスアンサンブル（佐東利穂子、アレクサンドル・リアブコ、高橋慈生（じょう）、佐

勅使川原三郎演出・振付『オルフェオとエウリディーチェ』
撮影：堀田力丸／写真提供：新国立劇場

藤静佳）を織り込み、登場人物の心理をダンスで象徴的に表現した。佐東がエウリディーチェの魂のように空間や光と戯れて舞うダンスは楽曲や歌声と有機的に絡みつき、時に音楽を増幅するように舞台を牽引した。

暗闇に浮かび上がる巨大な白い皿のような円形舞台と白百合の舞台美術が印象的で、物語の進行とともに照明を変化させ、地上と冥界を描き分け、生死を超えた愛を淡麗な抽象美でシンプルに描いた。

またこの年、勅使川原は自作ドローイングの映写とともに踊る新シリーズ「ドローイングダンス」を始動し、『失われた線を求めて』を初演。「アップデイトダンス」シリーズでは、佐東が新作ソロダンス『告白の森』を初演し、自作のテキストとともに身体詩のような幻想世界を展開した。

さらに勅使川原は、イタリアのベネチア・ビエンナーレのダンス部門で金獅子功労賞を日本人として初受賞。日本の文化功労者にも選ばれた。

金森穣率いるNoism（りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館専属舞踊団「Noism Company Niigata」）は、新潟の歴史と文化を掘り下げた。佐渡島の太鼓芸能集団「鼓童」と初の本格的なコラボレーションをした、“鬼”がテーマの新作二本立てである。

一幕『お菊の結婚』は、ストラヴィンスキーのバレエ音楽『結婚』を用い、金森が独自に解釈・演出。プッチーニのオペラ『蝶々夫人』に影響を与えたピエール・ロティの小説『お菊さん』を基に、明治初頭の日本を訪れたフランス海兵将校ピエール（ジョフォア・ポプラヴスキー）と、長崎の遊郭の遊女お菊（井関佐和子）の「現地婚」を描いた。お菊をはじめとした日本人は人形振りで踊り、西洋視線のオリエンタリズムを批判的に扱った。同時に、外国人を排除して殺める日本人の“鬼”の内面性を描き、お下げ髪の井関は可憐ながら芯の強さを秘めた演技で魅せた。

二幕『鬼』は、現代作曲家の原田敬子に「新潟」をテーマに依頼した新曲による鼓童との共演作。役行者（えんのぎょうじゃ）（山田勇気）率いる修験者たちが佐渡に渡り、遊女たちと出会う。そこには遊郭を開いた清音尼（せいおんぴくに）（井関）という尼僧がいたという設定。原田の新曲は、控えめにして精妙。大小の和太鼓類はもとより、銅鑼や鳴り物、奏者の息遣いまで、さまざまな音触を駆

Noism×鼓童『鬼』　撮影：村井勇／写真提供：りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館

使して有機的な響きの実験を試みている。それに応える鼓童のメンバーには演奏家としての新境地となった。Noismにとっても新潟の文化や歴史を題材にしながら、人間の内部に潜む“鬼”とは何かを探り、体現する作品となった。

平原慎太郎は、神奈川県民ホール開館50周年記念でフィリップ・グラスのオペラ『浜辺のアインシュタイン』の新演出に挑んだ。1976年のロバート・ウィルソン演出による世界初演は「イメージの演劇」と呼ばれ、天才物理学者アインシュタインの人生にまつわる断片的なモチーフがいくつか設定された。当時は核戦争の不安があり、タイトルも核戦争後を描いたネヴィル・シュートのSF小説『渚にて』からインスパイアされているが、平原はその時代状況を振り返りながら、ミシェル・フー

平原慎太郎演出・振付『浜辺のアインシュタイン』　撮影：加藤甫

コー、フリーダ・カーロなど自分の生き方を貫いた歴史的人物をキャラクターに設定したり、自由の女神の足首が鎖でつながれていたりなど、現在の視点から逆照射した。巨大なビニールシートを駆使して津波や福島原発事故、放射性物質による海洋汚染などのイメージも重ねていく。半世紀近く経った今も、世界が再び核や人権の危機に晒されていることを示唆する圧巻の舞台となった。

ダンスへの疑義と現実への問題意識

比較的若いミレニアル世代の女性アーティストの表現も注目された。彼女らに共通するのは既存のダンスへの疑義であり、自らの手で現実を捉え直す意識である。

下島礼紗（しもじまれいさ）主宰のケダゴロは、新作『**세월**』（「セウォル」のハングル表記）を初演した。2014年、韓国の海上で大型旅客船が転覆・沈没した事故に真正面から向き合った意欲作で、遭難した乗船者たちの極限状況を描いた。ただし、事件そのものを詳細に再現するものではない。舞台にはオレンジ色の平台が積まれ、その上に載っていたダンサーたちが降りるとセットは崩壊し、頭上の拡声器から「**가만히 있어**」（カマニイッソ：「動かないで」の意）という韓国語のアナウンスが断続的に流れる。そして韓国では有名な歌「**짜라빠빠**（チャラパパ）」が繰り返し流れては、奇妙な振付のダンスをユニゾンで展開する。また日本との領土問題でも知られている歌「独島は我が領土」も使用される。シーンによっては、腕立て伏せ、2人1組になっての倒立、息を止めるなど、肉体訓練的な動作もある。

ケダゴロ『세월』　撮影：草本利枝

下島は、出演者の身体に過酷なまでに負荷をかける創作法で作品を発表してきている。“「ダンス」とは、世の中を解釈する為の一つの手法である”という考えのもと、既存のダンスの美意識に染まらず、肉体実験を繰り返している。観客にダンスを鑑賞してもらうのではなく、観客とともに社

会について考えてもらうためのツールとしてダンスを用いている。直接知り得なかった社会的事件を批判的に取り扱い、観客もその状況を目撃することで、事実を認識し、思考を巡らしていくきっかけとなることを企図している。

下島はこれまでにも、オウム真理教の麻原彰晃を扱った『オムツをはいたサル』（2017年）や連合赤軍リンチ殺人事件を題材とした『SKY』（2018年）などを発表。松山ホステス殺害事件の整形逃亡犯・福田和子が題材の『ビコーズカズコーズ』（2021年）も再演ツアーした。

中川絢音（あやね）率いる水中めがね∞は『GOOD COW 権（けん）』を初演。冒頭からパンキッシュで狂騒的なロックに乗せ、総勢17名のダンサーが劇場空間全体を使って激しいアクションを展開する。やがて中２階から飛び下りたり、全員が包丁を握って威嚇したりと、自傷や加害、投身自殺、窒息死などを想起させるパフォーマンスへ移っていく。シンプルな動きのモチーフだが、焦燥や苛立ちの感覚がストレートにヒリヒリと伝わってくる。「自死に至る人の身体性」に着目し、描かれるのは死に囚われた人びとである。

中川は幼少期よりバレエと日本舞踊を学び、２つのダンススタイルの間でジレンマを抱えながらハイブリッドに融合させた創作を試みている。そうした中川の問題意識は、現実社会にも向けられている。年間自殺者が２万人を下らない日本では近年、拡大自殺や無差別巻

水中めがね∞『GOOD COW 権』　撮影：前澤秀登

き込み型事件も増えている。生きにくさや苛立ち、いつ暴発するかわからない不安定な自分たちをどう飼い慣らすことができるのか。同時代的な問題意識と感覚が端的にパフォーマンスに表れていた。

倉田翠（みどり）は、新作『今ここから、あなたのことが見える／見えない』を発表した（主催:大丸有SDGs ACT5実行委員会、一般社団法人ベンチ）。東京の中心地である大手町・丸の内・有楽町で働くワーカーを公募して参加を求めた取り組みで、有楽町のオフィスビルのワンフロアを会場にしたパフォーマンスに挑んだ。一見ドキュドラマのような構成だが、実際はポストドラマ演劇に近い。参加者一人ひとりが自己紹介するように語り出す。いろいろな人がいる。さまざまな社会的現実が立ち現れる。無個性に思えた個人の立場がクローズアップされる。人はなぜ生きるのか？　なぜ働くのか？　世界を認識する解像度が上がるパフォーマンスとなった。

倉田はこれまでにも、薬物依存の回復施設の入所者たちや地域の高齢者など、現実の“人と”向き合いながら作品化してきた。そこに生じる事象をフィクションとして立ち上がらせる「ダンス」の可能性を探求し、数々のプロジェクトを成功させている。

倉田翠演出・構成『今ここから、あなたのことが見える／見えない』　撮影：加藤甫

コロナ禍で徐々に拡充するダンス環境

コロナ禍は舞台活動にダメージを与えているが、アーティストをサポートしていくレジデンスや再演の機会も増えた。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT（愛知県豊橋市）では、2017年度より公募の「ダンス・レジデンス」事業を続けており、これが多くのアーティストの創作・発表の場となっている。

コロナ禍でオープンが遅れたダンスハウス「Dance Base Yokohama（DaBY（デイビー））」では当初の計画を変更し、レジデンスなどアーティスト支援プログラムを拡充。2022年は創作したレパートリーを「パフォーミングアーツ・セレクション」として全国7都市で再演ツアーした。

ヨコハマダンスコレクションの「コンペティション」ではコロナ禍以降、城崎国際アートセンター（KIAC）やアーキタンツがレジデンスでアーティストをサポートする賞を提供している。

横浜赤レンガ倉庫1号館は新たな振付家制度を2022年にスタートし、2年間の任期で梅田宏明が選ばれた。

このほか、各地のコンペやフェスティバルも、特に若手アーティストにとっては評価や実績を獲得し、再演の機会となっている。再演を繰り返していくことで、作品のブラッシュアップも図れるようになった。

こうしたなか、俳優・ダンサーの森山未來の動向が注目された。森山は出身地・神戸のデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）の創作プログラムに招かれ、脳科学者・認

森山未來×中野信子×エラ・ホチルド『FORMULA』　撮影：平林岳志

知科学者の中野信子とコラボレーションした『FORMULA』を試演。さらにそれを掘り下げ、振付にエラ・ホチルドを迎えて全国をツアーした。森山自ら各界のトップクリエイターをキュレーションして発展させ、ロビーを含めた劇場全体を展示空間のように構成し、作品をより深く共有できる趣向も施した。

一方、森山自らの発案によりアーティスト・イン・レジデンス神戸（AiRK）を開設。KIITOには宿泊施設がなかったことから、滞在創作に打ち込む芸術家への無償提供を目指し、運営資金をクラウドファンディングで募った。今後はAiRKを拠点に市内のアート文化施設とも連携し、充実して創作できる仕組みをつくる予定で、神戸市はパブリックアートで観光誘客する「KOBE Re:Public Art Project」のメインキュレーターに森山を任命した。

もう一つ注目されたニュースがある。伊藤郁女（かおり）がフランス東部のストラスブール・グランテスト国立演劇センター「TJP」のディレクターに就任が決まった。日本人がフランスの公共劇場の監督となるのは快挙である。日本とどのような連携が可能なのか、今後に期待したい。

つつみ・ひろし

1966年川崎生まれ。文化学院文学部演劇科卒。アート、エンタメ、演劇、ダンス等の専門誌編集を経てフリー。小劇場から新劇、アングラ、商業演劇、伝統芸能、ダンス等まで幅広く取材し、手がけた企画特集多数。トヨタコレオグラフィーアワード選考委員、ガーディアン・ガーデン演劇フェスティバルやSAI International Dance Festivalの審査員を歴任。編著に空飛ぶ雲の上団五郎一座『アチャラカ再誕生』、『現代ドイツのパフォーミングアーツ』、『ピーター・ブルック―創作の軌跡―』等。